

硬膜外麻酔を用いた無痛分娩についての評価 2016.1月

2012.5月より PCA 装置（麻酔薬の注入に用いる機械）を導入し、無痛分娩と帝王切開術後鎮痛に用いてきました。また、患者様にはアンケート形式で御意見をいただき、スタッフによる効果判定や PCA 装置の利用状況などを加えて評価いたしましたのでご報告申し上げます。

以前より硬膜外麻酔による無痛分娩をおこなって参りましたが、2011年6月よりは計画的無痛分娩にも積極的に取り組んできました。そんな中、2013年は52件、2014年は50件、2015年は81件の無痛分娩を行いました。

そのうち昨年1月から12月に行った症例中、患者様からのアンケートを回収できた55件とスタッフ評価表79件による評価結果をご報告させていただきます。

- ① 対象：2015.1月から2015.12月までに無痛分娩を行った症例
81例：初産婦さん46名 経産婦さん35名

初産婦さん、経産婦さんを比べると、初産婦さんの比率が上がってきています。(表1)

このうち、陣痛発来後に急遽無痛分娩を希望された方は5名でした。それ以外の76名の患者様は、当初からのご希望により無痛分娩を行いました。計画的な陣痛促進に先立って陣痛が始まったり、破水により入院となった方が15名おられましたが、全員出産に先立って麻酔を行うことができました。その他、無痛分娩をご希望された方のうち、4名は骨盤が狭いなどの理由で帝王切開分娩を選択することになりました。

(表1)〈無痛分娩を希望されました初産婦・経産婦の内訳〉(単位：人)

	2013年	2014年	2015年
初産婦	27 (50%)	23 (46%)	46 (57%)
経産婦	25 (48%)	27 (56%)	35 (43%)
総数	52	50	81

- ② 上記対象のうち、患者様よりアンケートが回収可能であった55名について、またスタッフ評価が可能であった79名についてご報告いたします。

無痛分娩を選択された理由について

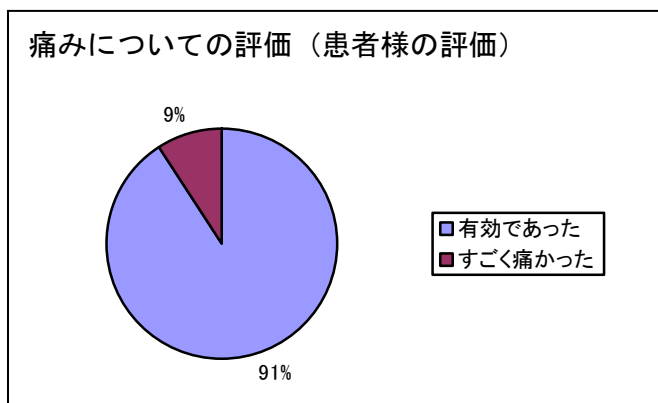
お産、特に陣痛に対する不安を上げた方が大半でした。特に、経産婦さんは前回の出産が大変であったご経験や、他院で無痛分娩をご経験から選択されたかたが多かったです。その他、産後の体力回復を期待して選択した方などがおられました。陣痛開始後に無痛を行った方は、お産に比較的時間がかった方が多く、これ以上の痛みや経過に耐えられなくなり不安が生じたために選択された方がほとんどでした。

患者様アンケートからみた痛みについての評価（55例）

有効であったと答えた方が 50名（91%） でした。その半面、すごく痛かったと答えた方が5名（9%）でした。この5名のうち1名のみが経産婦さんで、やはり初産婦さんの方がお産の負担を強く感じておられるものと思われます。また、まったく痛みがなかったと感じた方が9名（16%）おられました。（グラフ1）

この結果は前回報告の有効率84%と比較しても有効率が上昇していました。

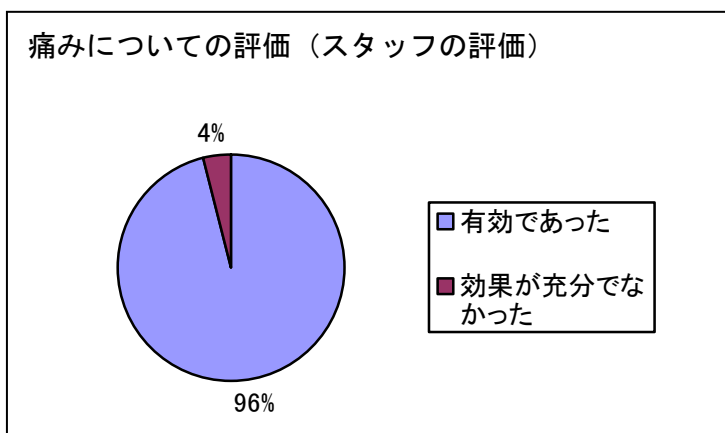
（グラフ1）



スタッフ評価表からみた痛みについての評価（79例）

有効であったと判断した例が 76例（96%）、効果が充分でなかったと判断した例は3例（4%）でした。さらに、ほとんど痛みがなくかなり有効であったと判断した例は24例（30%）ありました。（グラフ2）

（グラフ2）



昨年までは患者様アンケートの結果とスタッフの評価は少し異なっていました。つまり、スタッフが有効と判断していても、患者様はもっと痛みをとりたいと感じておられたということです。しかし、最近はお産をするためにいかに陣痛が必要か、また吸引分娩を減らすために出産間近の陣痛やいきみ感が必要であることを皆様にご理解いただくようご説明

させていただいております。これにより、患者様の無痛に対する期待度とスタッフの評価した有効度が一致してきたものと考えております。

また、自己調節鎮痛にあたり自分でボタンをおして薬を追加することが可能ですが、実際にはお薬が入る間隔や量は安全な範囲に調整されています。ですので、痛みが強くなるとボタンを押す回数が多くなり、実際にお薬が入る回数以上にボタンを押されることがあります。このような方は 32 名 (40%) と前年の 59% より減少しています。やはり陣痛が強まるにつれ麻酔薬の追加が必要ですが、それも痛みが強くなりはじめた際の一時的にすぎず、お薬が十分に足りてくるとまた落ち着いた状態になれる場合が大半でした。去年は最高では 42 回追加ボタンを押された方がおられましたが、5 回以内しか追加されなかった方が 58 名 73% を占めていました。2 回以下の方も 26 名 33%、一度も追加されなかった方は 2 名おられました。(表 2) にお示したように、やはり初産婦さんは出産にも時間を必要とし、経産婦さんよりも多く追加される傾向でした。

(表 2) 〈自己調節による麻酔薬の追加回数〉 (単位 : 人)

	5 回以下	2 回以下	0 回
初産婦	32	9	0
経産婦	26	17	2
全体に占める割合	73%	33%	2%

無痛分娩を行うにあたっての問題点

スタッフ評価より下肢のしびれがまったくなかった方は 23 名 (29%) でした。それ以外の方は軽度のしびれ感がありましたが、単独での歩行困難な方は 9 名 (11%) でした。このような場合には、麻酔を一時中断したり減量して対応するとしびれ感が和らいできます。少ししびれるぐらいが効果は高いように思います。

しかし、やはり麻酔が強く効くと陣痛が来ているのがわかりにくかったり、お産の際のいきみ (力をいれてきばること) ができなくなることがあります。このような方が、5 名 (6%) のみおられました。

また、硬膜外麻酔に使用するチューブの挿入時の痛みが辛かったと答えた方が 4 名 (7%)、誘発分娩に先立って行う子宮頸管の拡張が辛かったと答えた方が 8 名 (13%) おられましたが、前年よりも改善されています。

特に子宮頸管の拡張に関しては、辛かったと答えた方が去年の 26% から 13% に半減しています。お産をスムーズにすすめるためには必要なものではありませんが、やはり痛みを伴う処置だと思います。昨年より採用した子宮内にいれる風船 (バルーン) は痛みを軽減に寄与したものであると思います。

次回も出産される場合には無痛分娩を選択されますか? との質問には、

50 名 90% が次回も無痛分娩を希望されるとの回答でした。

4 名はどちらともいえない、また 1 名は十分な効果が得られなかったため次回は希望しないとの回答でした。

やはりご希望いただく限りは、十分に満足のご結果が得られるようさらなる工夫をしてゆきたいと思っております。

無痛分娩を受けてのメリットについてのご意見・ご感想

お産の流れがちゃんと分かり、産後もかなり体が楽だった。
お産って楽しいんだなあと思いました。

痛みが少なく余裕のある分娩でした。産後も前回のお産とくらべて、体の回復が早かったです。赤ちゃんが産まれた時も感動することができました。

自分で薬の量を増やせるというのは、ありがたかったです。

陣痛の最中、家族との会話が普通に出来たことに驚きました。

無痛より和痛を希望していたので、産む痛みもしっかり味わえて満足でした。

はっきりとした意識の中で自力でいきむこともでき、達成感を感じました。
無痛分娩に対してあまり良いイメージを持っていなかったが、あんなにリラックスしてお産に望めるのなら、はじめから希望しておけばよかったと思いました。

友達には是非勧めたいです。そして自然分娩で苦しまなくても、充分にお産の大変さもわかるし、産後の回復も早かったので、自分の娘にも教えてあげたいです。

出産の痛みへの恐怖と不安が強くパニックにもなりやすいので、できれば和痛分娩をと前から考えていました。また痛みを軽減して出産するという選択肢を持つことで、妊娠期間中も前向きに過ごすことができてよかった。

以上のような御感想をいただきました。

③ 総括

以上のように、硬膜外麻酔は無痛分娩にはきわめて有効な方法です。しかし麻酔や陣痛促進のために行う処置には、痛みなどの負担や経済的負担以外にも多少なりとも危険性を伴います。また陣痛が微弱なために、子宮口全開後も分娩に時間がかかったり、いきみがうまくできなかつたりしたために吸引分娩となった方が18名(22%)おられました。これは前回の結果36%からかなり減少しております。しかし、当院での普通分娩での吸引分娩率が8%であるのと比較すると高率です。他施設の報告では、無痛分娩時の吸引分娩率は50-60%程度の施設が多く、これと比較すると当院では低く抑えられているものと思われます。これも前述したように、出産間近の陣痛やいきみ感が必要であることを皆様にご理解いただくように努めてきた結果かと思われます。さらには、無痛分娩時に吸引分娩となった患者様の83%は初産婦さんで、経産婦さんでの吸引分娩率は8.5%と普通分娩と相違ありませんでした。

さらに、麻酔時の下肢しびれ感のなかった方が、前回の38%から今回の報告では29%と少し減りました。更なる工夫により、これらの成績も改善できるように勤めていきたいと思えます。そのためには、患者様が陣痛を自覚することができ、自分の力で出産ができる感覚を維持することが重要です。つまり、無痛分娩でもそれなりの痛みを自覚する必要があるということです。患者様の中には、無痛分娩はまったく痛みのないお産だと期待されている方もおられると思いますが、決してそうではないのです。陣痛を乗り切るひとつの手段をお考えいただければ幸いです。

アンケートでも前回は26%の方が痛かったと感じておられた陣痛促進に先立って行う子宮の出口を広げる操作も昨年は13%に半減し、シリコン製のバルーンなどを使用することで痛みの軽減を図る努力を始めた結果と思われまます。

理想的な無痛分娩とは、辛い痛みをとりながらご自分の力で出産が出来るものではないかと思えます。しかし、痛みの感じ方や経過は様々です。

その皆様のご希望に添えるように工夫していくことも重要であると考えております。

最後に文献から見た無痛分娩における医学的メリット・デメリットをお示ししておきましょう。

メリット

1. 高年初産や妊娠高血圧症候群などの、ハイリスク妊娠に有用。
2. 赤ちゃんが産まれてから胎盤が出るまでの時間(分娩第3期)が短い。
3. 外陰部の伸展効果のため、児頭下降や吸引分娩操作が容易である。
4. 外陰部の麻酔効果により、産後の創部縫合などの処置がしやすい。
5. 母体の体力が温存され、産後早期より赤ちゃんとかかわれる。

デメリット

1. 麻酔薬や操作にともなう副作用に注意が必要。
2. 吸引分娩率が高い。産道での児頭回旋異常率が高い。
3. 微弱陣痛になりやすく、陣痛促進剤使用率が高い。
また、分娩までの所要時間も延長する傾向にある。

自然分娩と違いを認めない点

1. 緊急帝王切開となる率や分娩時の出血量には相違がない。
2. 新生児に対する影響についても差はないとされている。
逆に、分娩時の痛みは胎児への酸素供給量を減少させるので効果的な無痛分娩は胎児にもメリットがある可能性もある。



以上のような結果をふまえ、無痛分娩の選択をご検討いただければと思います。